

第2回 経営者の『志』を表現する DESIGN ISM

経営者の想いを、ブック型の名刺で表現するこの企画。
今回お招きするのは、ミドルエイジの女性に特化したサービスを展開する、
株式会社フラジュテリーの代表取締役 橋田佳音利氏。

この分野の先駆者ともいえる同社がどういった想いで設立され、なにを目指しているのか。
橋田氏の生い立ちやプライベート、社会経験などに迫り、その想いを引き出した。

私はとても厳格な父に育てられました。大学を卒業するまで門限は19時。友達と遊ぶこともままありませんでした。でも、物は考えようで「だったら泊まりに行つて次の日の19時までには帰らばいい」と思うようになったりして、過酷さをバネに、したたかになれた気がしました。

父は厳しかった反面、妙に甘い部分もありました。中学からヨットをはじめ、大学時代にはお金を貯めてヨットを味わうとしたのですが、半分ほど資金援助してくれたのです。

そんなこともあり、真剣に練習しました。ヨットを操るには体重が軽く不利な条件でしたが、筋肉を鍛えてオモリを背負うなど工夫をした結果、1979年の全日本選手権ではなんと優勝することができたのです。努力すれば結果が出ることを、このとき身をもって体験した気がします。

また、ヨットの世界大会であるワールド・ウーマンズ・セーリング・チャンピオンシップにも参戦しました。しかし、このときは出場することだけを目標にしていたので結果は散々。参加で

きたことで、満足してしまっていたんですね。この時、目標は高く持たなければならぬと痛感しました。

大学卒業後、最初に入った会社が住友電工です。結婚退職するまでの約1年間の勤務でしたが、社員の方とは今でもお付き合いがあるほど有意義な時間でした。

小さいころから活発だった私は、結婚して家庭に入るのが性に合わず、またすぐに働くようになりつづきます。会社を経営していた父のところで働いたり、CADの請負業を行ったり。20代、30代と色々な仕事を体験しましたね。ヨットのようにずっと続けているものもある反面、好奇心旺盛な面も持っていました。

でも、「これこそが自分のやるべきことだ」と使命感を感じたのが、現在の女性を応援する仕事です。きっかけは、40代前半の時。離婚を経験していた私は以前から女性が自立する必要性を感じていました。それも、紹介業界に入つて女性の就職支援をしたいと思つたんです。しかし40歳を越えていた私にとって、紹介会社への転

職は難しく、今の社会ではミドルエイジの女性の働く機会が少な過ぎるということをも身を持って体感させられました。そして、この風潮を変えられるのは自分しかない！と、2003年に今の会社を設立したのです。

一般的にみて不利な条件にある方々のサポートですが、彼女たちには彼女たちにはかない魅力がたくさんあります。そのよさを企業にはもちろん、本人たちにも分かってもらいたい。ミドルエイジの女性が生き生きと働ける社会を目指し、世の中に貢献していきたいですね。たとえ不利な条件でも工夫次第で上を目指せること。目標は常に高く設定する必要があります。ずっと続けてきたヨットからは色々なことを学びましたが、自分の大きな目標に向かってこれからも努力していきたいと思つています。



約1時間半にも及ぶインタビューを快く引き受けていただいた橋田社長。

Kaori Kitsuda

●橋田佳音利
株式会社フラジュテリー 代表取締役
エグゼクティブ マチュアバイザー
東邦音楽大学 声楽科卒業後、住友電工へ入社。結婚のため退職するが、半年後には別の会社にてキャリアを再スタート。営業、営業事務、CAD請負業、モデル、雑誌記者など様々な職種を経験。2003年フラジュテリーを立ち上げる。趣味は38年間続けたヨットで、大学時代には全日本選手権で優勝するほどの腕前。
●株式会社フラジュテリー
女性に特化した人材の雇用創出コンサルティング会社として、2003年に設立。中でも、ミドルエイジの女性に強みを持つ。メンタルスキルを重視した研修を行うなど、煌く人材の紹介には定評がある。
<http://www.frajouterie.com>

Shigetaka Yasunaga

●安永成隆
グラフィックデザイナー/アートディレクター
株式会社ラプター 取締役
官公庁や大手企業広告での豊富な経験に基づき、中小企業を対象とした「反響の出る営業販促ツール」「メディア型企業マガジン」のコンサルティングからデザイン制作までを行う。アートディレクターとして活動する傍ら、クリエイター向けセミナーを開催し、自ら講師も務めるなどその活動範囲は多岐に渡る。
審査員経験：
東京郵政局 管内経営方針ポスター審査会審査員、
第4回東京絵手紙大賞審査会審査員、
第1回全国年賀状大賞審査会審査員等。
<http://www.raptor.jp/>



●アートディレクター 安永氏が語る名刺作り

今回、フラジュテリーの橋田社長の名刺を作るにあたり、色々なお話を伺いました。橋田社長は一言で言うとうと熱い方です。インタビュー中もコメントの端々に熱い想いが伝わってきました。

僕は、常日頃から名刺は究極の営業ツールに成り得ると考えています。ですから、今回作る名刺が、橋田社長の分身になってくれればいいなという想いでデザインしています。つまり、初めてこの名刺を受け取った方に、橋田社長がどんな人なのか、またどんな考えの持ち主なのかダイレクトに伝えることができる名刺です。前半の4ページにはそのメッセージが集約されています。

イメージカラーのピンク系は、橋田社長のイメージをそのまま反映させました。今回は特にコピーに力を入れてますので、受け取った方には、じっくり読んでいただきたいですね。



裏表紙 表紙



01 02



03 04



05 06



07 08



09 10

●表紙は名刺としての機能を残すため、全体のキーとなるキャッチ写真を入れることで相手により印象づけられるデザインとしている。中ページの構成は、ページをめくる流れを意識し、[メッセージ] → [サービスメニュー] → [お客様の声] → [プロフィール] と大きく分けて4つの構成とした。特に今回は、前半の4ページ分にメッセージを集約し、よりメッセージを強調した作りとしている。全体のカラーは、橋田社長（フラジュテリー）のイメージを忠実に再現。「煌く自分作創り」をそのまま表現できるピンク系を使用。

●橋田氏のコメント

色味も内容も、フラジュテリーのカラーが名刺全体に非常に良く表されている、と感動いたしました。

今までに持ったことはおろか、もったこともない名刺だったのでブック型というのは非常に目新しいです！

そして、フラジュテリーと橋田佳音利をトータルにアピールしてくださっているのが、私が話さなくてもこれを読んでもただわかれる！ともいえる素晴らしい名刺だと思います。

また、父に関してのことが活字になるのは初めてかもしれませんがね。夜遊びのことなんかも時効だから「ふっ」と笑ってしまいました。この名刺を受け取った方が、どんな反応をしてくださるのか、今から楽しみです。